猪苗代正益奥書『伊勢物語抄（紹巴抄）』の一伝本について

妹尾好信

【キーワード】伊勢物語、里村紹巴、猪苗代兼如、猪苗代正益、伊達政宗

はじめに

連歌師里村紹巴の説を記した『伊勢物語』の注釈書は数々伝来しており、『（伊勢物語）紹巴抄』と総称されるが、本文的には種々のバリエーションがあって一様ではない。写本で伝わる以上、転写の過程で異同が生じることはもとより、そもそも講釈の聞き書きは書き留めた人物によってさまざまな相違を見せるものである。そして、講釈も一度きりのものでもない。またこの種の注釈書には、後人が増補や編集の手を加えることもよくあるからである。本稿では、そのような『紹巴抄』のうち、増補本系の一形態を示す架蔵の一写本を紹介する。

一　架蔵『伊勢物語抄』の書誌

はじめに書誌を記す。

写本一冊。表紙寸法、縦二六・〇cm×横一八・五cmの大本。表紙は緑がかった灰色の紙表紙で雷文繋ぎに桐唐草模様の型押し、左上に題簽が貼られていた跡があるが剥がれていて、外題はない。巻首に「〇伊勢物語抄」（丸印は朱）と内題がある。楮紙袋綴。墨付一〇二丁。一面一〇行書き。一行は二〇字～二五字程度。全編にわたって朱引・合点・振り仮名を朱で施してあり、注釈項目の頭にも朱の圏点がある。振り仮名や付訓は墨書のものもあり、上部欄外への書き入れもまま存する。近世前期の書写と見られる。明確な旧蔵印は見られないが、巻首上部に「天」の字を図案化したような縦長の朱印が捺されている。

本書には、末尾第一〇二丁表に次のような奥書がある。

此一冊者任政宗公貴命紹巴老人被註
置本兼如加筆者也雖為秘蔵長谷河
長門守殿依御執心講説之次令付与

之堅可被禁他見而已

慶長十七年文月廿五日　　正益在判

栗種斎

これは言わば写本の素姓を証明する加証奥書または書写を許して与える旨を記した付与奥書で、本書のもとになったのは里村紹巴が著した『伊勢物語』の注釈であって、それに伊達政宗の命を受けて兼如が加筆したものであると言う。そして、秘蔵の書であるが、「長谷河長門守」なる人物が執心するので講義のついでに付与するものであって、固く他見を禁ずると言っている。時は慶長十七年（一六一二）七月二十五日、記したのは「栗種斎」と号する「正益」という人である。

兼如というのは、猪苗代兼載から数えて五代目にあたる連歌師である。猪苗代家は兼載の養嗣子兼純の頃から代々陸奥の伊達家に仕えたことで知られている。兼如も初代仙台藩主伊達政宗に召し抱えられ、信望が篤かったようである。兼如自身は京都に住んだが、政宗はしばしばその居を訪れたという（福井久蔵『連歌の史的研究』〈昭和44年　有精堂出版〉）。栗種斎正益は兼如の弟である。兼如は歌道においても細川幽斎から古今伝授を受けたが、弟の正益も近衛信尹から古今伝授を受けている。正益も兄兼如と同じく伊達家に仕え、やはり政宗の恩顧を受けた。それどころか、正益は兼如とは違って仙台に住むことが多かったようである。伊達家の重臣伊達成実（一五六八―一六四六）の著になる『政宗記』に、政宗の猪苗代家の連歌師歌人重用のさまが次のように記されている。

その頃、都より兼如、その子の兼与、同じく甥の兼益、その外兼也なんどと云ふ歌人を招き、造作を以て召し抱え、江戸・仙台をかね上下の奉公、剰へ兼如の弟正益をば、家来の者の為なりとて抱ひ給ひ、妻子ともに引き下し、長時不断在城に置き給ふ。

（『仙台叢書』第十一〈大正15年　仙台叢書刊行会、復刻版・昭和47年　宝文堂〉所収の翻刻により、表記・清濁・句読点などを適宜改めた。）

政宗は猪苗代家の連歌師たちに居所を与えて召し抱え、都から江戸・仙台に呼んでは奉公させた。中でも、兼如の弟正益は、家来たちのためにというので、妻子を連れて仙台に下らせ、長期にわたって仙台城に置いたという。正益は仙台にあって、伊達藩家臣たちの和歌・連歌指南役をつとめていたのである。

本書を付与された「長谷河長門守」もおそらく伊達藩士であろうと思われるが、『伊達世臣家譜』や『寛政重修諸家譜』に該当者らしき人物が見えず、今のところいかなる者か不明である。だから確証はないが、この奥書によって、仙台伊達藩において正益が『伊勢物語』の講釈を行っていたこと、そして正益によって兼如増注本『伊勢物語紹巴抄』が伊達家臣に伝えられたことが推測される。本書は伊達藩における古典享受の一様相を知ることので

二

きる貴重な資料であると言えよう。なお、正益は伊達政宗の命によって『源氏物語』の梗概書『源氏栄鑑抄』を著したことでも知られている。伊達藩における猪苗代正益の文学活動の一端を示す資料としても注目すべきであろう。

ところで、実は本書と同じ奥書を持つ本が東山御文庫に存在することが知られている。大津有一著『伊勢物語古註釈の研究　増訂版』（昭和61年　八木書店）に次のようにある。

紹巴抄かと目されるものに数種の別があり、さらに後人の手の加わったものもあることは、私もすでに説いたことがある。ここに挙げる本も紹巴の注釈に兼如が加筆したもので、云うなれば、兼如増注の紹巴抄である。奥書によれば、

此一冊者、任二政宗公貴命一、紹巴老人被レ注置本兼如加レ筆者也。雖レ為二秘蔵一、長谷川長門守殿依二御執心一、講説之次令レ付二与之一。堅可レ被レ禁二他見一而已。

栗種□　正　益　在　判

慶長十七年文月廿五日

とある。元来紹巴抄の特徴のいちじるしいものとしては、まず巻頭に定家自筆本の解説をしていること、次には第七十五段の「よにあふ事」の注として「永禄八年迄六百八十年也」とか、「元亀三まで六百九十三年に成了」とか記していること、奥に永禄八年の紹巴の識語のあることなどが眼につく。

東山御文庫蔵伊勢物語聞書は袋綴一冊。一面十一行、平仮名交り。細字書入あり、江戸初期の写。巻頭には伊勢物語聞書として、定家自筆の天福本や武田本のことを述べ、第七十五段には「文禄五年マデ七百十九年か」とある。永禄八年の紹巴の識語はないが、紹巴の注釈に兼如が加筆した旨の慶長十七年の奥書がある。

この本はまだ調査の機会を得ていないので確かなことはわからないのだが、本書と同一の付与奥書を持つことから、内容的にも同じ本なのであろうと思う。しかしながら、本書の巻頭にある内題は「伊勢物語抄」であって、東山御文庫本の「伊勢物語聞書」とは異なっている。また、大津氏が東山御文庫本の第七十五段の注にあると言われる「文禄五年マデ七百十九年か」という記述も本書にはない。どうやら全く同じ本というわけではなさそうだ。

二　兼如増注本『伊勢物語紹巴抄』の伝本

鉄心斎文庫に「伊勢物語聞書」と内題のある一冊の写本があり、『伊勢物語兼如注』の名で影印刊行されている（『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第六巻〈平成元年　八木書店〉）。青木賜鶴子氏の解題によれば、同本は東山御文庫本『伊勢物語聞書』と「同じもの」であるという。さすれば、同じ奥書を持つ本書とも「同じもの」だということになる。ただし、鉄心斎文庫本には正益の奥書はないので、全く「同じもの」というわけではない。どこまで「同じ」なのかは本文を細かく比較してみなればわからない。

青木氏によれば、兼如が注を加筆した『伊勢物語紹巴抄』の伝本は、鉄心斎文庫本・東山御文庫本を含めて五本が知られるという。青木氏の整理に従って次に掲げる。

A鉄心斎文庫本

外題ナシ。内題「伊勢物語聞書」。一冊。

奥書「右之本紹巴内本にして不断人にも読聞せ給ひしよし也。是内縁之者雖為所持其仁於江府去人依執心則忍借して江州於彦根予又写之」云々。この本は紹巴手沢の本で、縁者が所持していたものだが、江戸においてさる人がこっそり借り出したものを、近江の彦根で「予」がまた写したという書写奥書。「予」が誰かは不明。

B名古屋大学附属図書館蔵皇学館文庫本

外題「伊勢物語抄兼如私」。内題「伊勢物語聞書」。一冊。

奥書「此伊勢物語抄者父兼如雖為秘本深依御懇望許書写者也　寛永九仲冬念三　看松斎兼与（花押）」。寛永九年（一六三二）十一月、兼如の息兼与の付与奥書である。

C東山御文庫本

外題「伊勢物語聞書」。内題「伊勢物語聞書」。一冊。

奥書　前掲、慶長十七年七月二十五日の猪苗代正益による付与奥書。

D秋月郷土館蔵黒田文庫本

外題「伊勢物語聞書」。内題「伊勢物語聞書」。一冊。

奥書ナシ。

E岡山大学附属図書館池田家文庫本

外題「伊勢物語」。内題「伊勢物語抄」。上下二冊。

奥書「享保十四己酉年霜月吉日」。享保十四年（一七二九）十一月の書写奥書。

この五本に加えて、片桐洋一氏所蔵本が『伊勢物語古注釈書コレクション』第三巻（平成14年　和泉書院）に「伊勢物語聞書兼如」の書名で翻刻刊行されている。早川やよい氏の解題によれば、「該本は奥書を有さないという違いだけで、鉄心斎文庫所蔵『伊勢物語聞書』（鉄心斎文庫古註釈叢刊第六巻に『伊勢物語兼如注』と名付けられて所収）と同種同系のものである」という。これを第六の伝本として、やはり早川氏の解題により簡単な書誌を掲げる。

F片桐洋一氏蔵本

外題ナシ。内題「伊勢物語聞書」。一冊。宮田和一郎氏旧蔵。

奥書ナシ。

他にもいまだ学界に紹介されていない伝本が存在するだろうとは思うが、今のところ世に知られている兼如増注『伊勢物語紹巴抄』はこの六本であるようだ。したがって、本書は第七の伝本ということになる。奥書の一致から、C東山御文庫本に最も近いと予想されるのだが、当該本はいまだ調査できていないので、六本

のうち唯一活字翻刻されているF片桐洋一氏蔵本との間で本文の比較を行い、影印刊行されているA鉄心斎文庫本をも参照しつつ、本書の本文の特徴について検討を加えることにする。東山御文庫本の本文との詳細な比較は、いずれ調査の機会を得てから稿を改めて行いたい。

三　片桐洋一氏蔵本との項目異同について

本書は、巻頭に『伊勢物語』の伝本に関する総説を置き、以下は『伊勢物語』の本文の一部を見出しとして掲げ、その箇所に関する注釈を記している。本書は各見出しの頭に朱点を施し、章段の最初の見出しの上に章段番号を墨書しているが、片桐本には朱点・章段番号ともにないようである。鉄心斎文庫本には朱点も章段番号もあるので、その点では本書は鉄心斎文庫本に近いスタイルになっている。細かい本文の異同は多くて多岐に渉り、取り上げると煩瑣を極めるので、ここでは、注釈項目そのものの相違を見出しによって検討することにする。

本書と片桐本との間の項目異同は以下の通りである。

①第一段

〔片桐本〕

といふ歌の心ばへ也　双紙、作者詞也。歌の作意、用かへたる事をいふ也。

いちはやき　早速也。卒に返歌したると也。

むかし人　是は伊勢が詞歟。ふるき注にも如此のちに見当也

〔本書〕

・といふ哥の心はへ　双帋作者の詞なり哥作意用かへたる事をいふなり　昔人　私ニ　是ハ伊勢か詞也　古注にも如此後ニ見当

・いちはやき　早逸也卒に返哥したると也

片桐本は「いちはやき」「むかし人」の順に見出しが並び、本書では「昔人」の項目が「といふ哥の心はへ」の項目の末尾に続けて記されている。『伊勢物語』本文は「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」とあるので、片桐本は順序が入れ替わっている。本来、本書のような順であり、「昔人」を見出しとして項目を立てる形が正しいはずである。なお、鉄心斎文庫本も片桐本と同じ形になっている。

②第三十九段

〔片桐本〕

車なりける人　女とみるはわろし。業平成べし。

この項目、本書にはない。鉄心斎文庫本も片桐本と同様であり、本書の脱落である可能性が大である。

③第四十一段

〔片桐本〕

しはす　物の。

この項目も本書にはない。鉄心斎文庫本も片桐本に同じだが、ここは注釈文が途切れた形になっているがゆえに省略されたのか

も知れない。

④同段

〔片桐本〕

いやしきわざも　（注釈文略）心ぐるしかりければ。（ママ）

ろうさう　（注釈文略）

〔本書〕

・いやしきわさも　（注釈文略）

・うへのきぬ　袍（ハウ）也

・心くるしかり

・ろうさう　（注釈文略）

片桐本が前項末に続けて記す「心ぐるしかりければ」を、本書では「心くるしかり」を見出しとして項目を立てる。ただし、注釈文はない。本来は見出しであるべきものが、片桐本では注釈文がないため前項末に紛れ込んだものであろう（鉄心斎文庫本も同様）。それにしても本書の形が本来のもので、注釈文の追記を期した見出し項目と考えられる。

⑤第四十三段

〔片桐本〕

名のみたつ歌　（注釈文略）庵おほき歌、心明也。方々へ心はかよふ共、我方へさへうとからずはたのまんと也。

〔本書〕

・なのみたつの哥　（注釈文略）

・いほりおほきの哥　心明なり方〳〵へ心ハかよふとも我方へさへうとからすはたのむとなり

片桐本は「庵おほき歌」云々を前項末に続けて記す（鉄心斎文庫本も同じ）が、本書では項目として立てる。本書の形が正しいことは言うまでもない。

⑥第四十八段

〔片桐本〕

今ぞしる歌　（注釈文略）かれずとふべかりけりは、油断せずの心歟。所により心かはるべし。

〔本書〕

・今そしる哥　（注釈文略）

・かれすとふへかりけり　油断せすの心歟所によるへし

片桐本は「かれずとふべかりけり」云々を前項の注釈文末尾に続けて記す（鉄心斎文庫本も同じ）が、本書では項目として立てる。和歌の中の言葉なので、前項の注釈として読めるが、本書のような形が本来ではないかと思われる。

⑦第七十八段

〔片桐本〕

年比、よそには　よそ〳〵には、自然つかへたれども也。よるのおまし　夜御席。只、御寝所ノ用意也。

〔本書〕

・年比よそにハ　よそ〳〵にハ自然つかへたれとも也よるのお

まし夜御席（ヨルノヲマシ）　只御寝所の用意也

本来項目であるはずの「よるのおまし」云々を本書では前項末に続けて記す。ここは片桐本（鉄心斎文庫本も同じ）の形がよい。

⑧第八十三段

〔片桐本〕

日比へて　前段とおなじ。此宮（三条）は、京なるべし。

第八十三段冒頭の項目であるが、本書にはこの「日比へて」の項目がない。脱落であろう。

⑨第八十五段

〔片桐本〕

ひねもす　終日也。

この項目も本書にはない。脱落と思われる。

⑩第百一段

〔片桐本〕

なさけある人　行平の心を云。

花のしなひ　藤のふさの躰也。（以下略）

〔本書〕

・なさけある人　行平の心を云

・あやしき　奇異なる藤と云儀也

・花のしなひ　藤のふさの躰也（以下略）

片桐本には「あやしき」の項目がない。鉄心斎文庫本にはあるので、片桐本独自の脱落と見られる。

⑪第百三段

〔片桐本〕

心あやまりや　実要といひしかど、何としたる心のあやまりにや有けんと也。

ねぬる夜の歌　ねぬる夜の夢とは、ほのかに逢みし事を云也。（以下略）

〔本書〕

・心あやまりや　實要といひしかと何としたる心のあやまりにや有けんと也

・みこたち　誰ともなし

・ねぬる夜の哥　ねぬる夜の夢とハほのかに逢みし事を云也（以下略）

ここも片桐本には「みこたち」の項目がない。鉄心斎文庫本には存するので、やはり片桐本独自の脱落であろう。

⑫第百十四段

〔片桐本〕

さる事にげなく　行平、此時六十九才ト云々。

にげなくは　似合げなき也。

〔本書〕

・さる事にけなく　行平此時六十九才と云云にけなくハ似合けなき也

片桐本が二項目にするところを本書は一項目にする。前項の見

出しが「さる事にげなく」とあるので、後項の「にげなくは」は重複しており、「にげなくは」というのも見出しとして不自然である。鉄心斎文庫本も片桐本と同じ形であるが、本書のような形が本来のものであろう。

その他、本書では、片桐本と比べて項目に次のような相違がある。

・第二十一段の「忘るらんと歌」の項目が脱落し、上部欄外に補記されている。

・第二十七段の「水くちに歌」の項目が脱落し、補入符号を付して上部欄外に補記されている。

・第二十九段の「花の賀」の項目が、その前の「春宮の女御の」の項目に続けて書かれ、見出しが埋没した形になっている。

・同段の「花にあかぬ歌」の項目が脱落し、補入符号を付して上部欄外に補記されている。

これら四点はいずれも本書の不備と言うべきであるが、項目の異同全体を見ると、①・④・⑤・⑥・⑩・⑪・⑫は片桐本（⑩・⑪以外は鉄心斎文庫本も含めて）に比して本書の方が本来の形を留めていると考えられる。本書によって、片桐本や鉄心斎文庫本の不備を正すことができるのである。

四　欄外・行間書き入れの有無と相違

次に、上部欄外や行間に小字で書き入れられた注記の有無と相違点について見ていく。書き入れは伝本間で最も相違が多い箇所と思われ、伝本の特徴を示す尺度になりうると思われる。

①第一段「うゐかうぶりして」の項

「臣瓚は人の名也。漢書の注書たる人也。外記極蔠見出ざる、所詮、元服をうゐかうぶりとよむにて可然也」とある箇所に関して、本書には上部欄外に次のような書き入れがある。

臣瓚ヲ人ノ名ト云コト外記ノ極蔠ト云者見出タルト也

片桐本にも鉄心斎文庫本にもない書き入れだが、意味はよくわからない。

②第四段「おほきさいのみや」の項

片桐本の本文には、「染殿后、順子の非順子、明子也。子細末注之御事也」とあって、乱れている（鉄心斎文庫本も同様）。ここは、本書に「染殿后順子の御事なり五条后とも申也文徳天皇の后清和天皇の御母忠仁公の御むすめ也　非二順子一明子也子細末二注レ之」とあるのが正しく、その箇所に関すると見られる上部欄外書き入れに、「良房御娘明子也　文徳天皇后清和御母后也」とある。本書が独自に記した勘物らしい。

③同段「梅の花ざかりに」の項

ここに引用された漢詩句「春風桃李花開日　秋露梧桐葉落時」

に関して上部欄外に「白楽天詩也」と注記する。これは「長恨歌」の一節である。

④第五段「心やみけり」の項

「染殿后の心ニ、業平世俗ニ心いたきなど云心也を少憐愍の心出来たる也」とある、小字注（鉄心斎文庫本では割書）の部分が本書にはない。

⑤第六段「しら玉か何ぞと歌」の項

「みじかき詞、ゆへある事、連綿也」の部分に関して、本書は上部欄外に「連綿ハツラナリツゞキタルコト也」と語注を施す。

⑥同段「いとこの女御の」の項

五条后二人説に関して「始（ノ）は、仁明天皇后」とある箇所の小字注が、片桐本では「順子なれば、二条ノ后ノいとこに順子なれ○（一字落歟）ば、あふ也」と乱れている。ここは本書では、「順子なれハ二条后のいとこにあらす明子なれはあふなり」とあって乱れがない（鉄心斎文庫本も同様）。「あふなり」は、従姉妹であることに合致するの意。本書では小字ではなく本行に書かれている。

④第三十九段「出ていなば歌」の項

片桐本に「ともしけちは、如煙尽灯滅の心にて、命の消をいへり」（鉄心斎文庫本も同じ）とある部分の「煙」が本書では「油」とあり、上部欄外に「油ツキテ灯メツスルガゴトク」と訓読文を注記する。

⑤第五十段「鳥の子を歌」の項

片桐本の「説苑（ゼイヲ）引て文選（ニ）かけると云々」の一文が本書にはなく、上部欄外に「文選註説苑（セツエンニ）」と記す。また、「あやうき事を累卵と云と云も」の部分に関して上部欄外に「卵（カイコラン）」と注記する。

⑥同段「あだくらべ」の項

片桐本（鉄心斎文庫本も同じ）末尾の小字注「是も女、誰とはなけれども、小町があだくらべと、世にはいひきたれり」がない。

⑦第五十九段「となむいひて」の項

注釈文中の「造次顛沛」という語に関して、本書は、上部欄外に「造次（サウシ）顛沛（テンハイ）少モ間ノナキ心也」と注記する。

⑧第六十段「ある国のしぞうの」の項

末尾の小字注の最後にある「かやうのよみくせ歟」の一文が本書にはない。本書では小字注部分はすべて本行に記す。

⑨第六十七段「きのふけふ歌」の項

注釈文中の「悋惜」の語に関して、本書は、上部欄外に「悋（リンヲシム）俗ニ作レ恡ニ惜（セキヲシム）」と注記する。

⑩第六十九段「まだ何事も」の項

片桐本に「今に、此氏の人（たかしな氏ノコト也）、太神宮へ不参と也」とある箇所の傍注「たかしな氏ノコト也」が本書にはない。

⑪第七十二段「おほよどの歌」の項

片桐本の小字注「私、古今不見」が本書にはない。また、上部欄外の書き入れ注「となりの国へいくとては、伊勢より尾張へな

り　説の事を書也」が本書にはない。鉄心斎文庫本はともに片桐本と同じ。

⑫第七十七段「さゝげ物」の項

「金にて枝のある木をうちて」の傍書「うち枝と云也」が本書にはない。

⑬第七十九段「我門に歌」の項

「是を礼節たとふ」の右傍に、本書は「竹ノ中ハウツヲナリ」と注記する。これは本来、少し前の「竹は、空虚にして」に関する注記と思われる。

⑭第八十三段「枕とて歌」の項

引用された「わすれめやあふひを草に引むすびかりねの野べの露の明ぼの」について、片桐本は作者を「式子内親王」と注するが、本書には「定家」とある。この歌は、『新古今集』巻三・夏・一八二に載る式子内親王の歌なので、片桐本（鉄心斎文庫本も同じ）が正しい。

⑮第八十七段「昔の歌に」の項

引用された和歌の「しかのあまの」の右傍に注記された「筑前也」が本書にはない。

⑯同段「ながさ二十丈、ひろさ」の項

「天台山賦」に関して、本書は、上部欄外に「天台山賦文選有之」と注記する。

⑰同段「あまれりや、たらずや」の項

末尾の小字注「私、伊勢ことば也」が本書にはない。

⑱第九十二段「あしべこぐ歌」の項

引用された「堀江こぐ棚なしを舟漕かへり…」の歌に、本書は「古今」と出典名を注記、また「こき帰り」と異文注記あり。

⑲第九十九段「ひおり」の項

本書は、上部欄外に「五月五日左近ノ真手番六日右近ノ真手番也」と記すが、これは注記ではなく、本文「三日は左近の真手番四日は右近の真手番也」の後に脱落した文を補記したものと見られる。

⑳第百十一段「下紐の歌」の項

引用された歌「眉ねかきはなひ紐とき待らんか…」にある傍書「鼻ヲヒルコト也」は本書にはない。

㉑第百十八段「玉かづら歌」の項

「老懸を玉かづらといふとみえたり」の傍注「女ノカクルカヅラ也」が本書にはない。

㉒第百二十一段「鶯の歌」の項

「春柳をかた糸によりて…」の歌の肩にある「催馬楽」の注記が本書にはない。本書では初句「青柳を」。

以上のごとくで、欄外・行間の注記に関しては、本書と片桐本のどちらがすぐれているかというような判断はできない。共通するものがあるのはもちろんだが、それに加えて、それぞれに自由領域として独自の注記を書き入れているということが言える。

五　特筆すべき本文の相違について

最後に、本書と片桐本の間の特に注意すべき本文の相違点をいくつか挙げておく。

①第六段「あくた川と云所をゐていきければ」の項

片桐本は項目末尾が「将軍など申事にて、御分別まいるべし」とある（鉄心斎文庫本も同じ）が、本書は、「将軍なと申も軍をひきゐての心也それにて御分別まいるへし」とある。片桐本・鉄心斎文庫本には脱落があろう。

②第四十一段「紫の歌」の項

末尾の「名山記」の引用が本書にはない。

③第五十八段「鳥の子を歌」の項

末尾の「哀ここにては　あつ□□□（はれ也）所により心程々ある歟」が本書にはない。

④第五十九段「住侘ぬ歌」の項

引用された歌「住侘て…」の末句が本書では「月の影哉」となっている。末尾の「右二首共、以俊成卿歌也。両説を用られた□□□（る支証）也」がなく、二首の引用歌の前に、「俊成両説を不捨二首よめり」とある。

⑤第六十九段「かきくらす歌」の項

本書は、末尾に「こよひ定めよのこよひの所世人と有也　世人イ也」という文がある。本書独自の付加か。

⑥第七十四段「岩根ふみ歌」の項

「咫尺千里の心あるべし」の次に、本書は「咫尺は少の事也」の一文がある。

⑦第八十七段「はるゝ夜の歌」の項

末尾に、本書は、「祇註にハはるゝ夜の哥三つともにうたかひと也何も可然也」の文がある。片桐本にはないが、鉄心斎文庫本には上部欄外書き入れ注として記されている。

⑧第九十二段「あしべこぐ歌」の項

「舟には必棚あり。棚なきは、いたりての小舟也」の部分が本書にはない。

⑨第九十六段「とかきて」の項

本書は、『源氏物語』桐壺巻の引用部分に、本文と割注の間に錯誤・混乱がある。「かくなからともかくもならんと御覧じはてん更衣の成果給はん程を禁中なから御覧果たくみかとは思召也とおほしめすに」云々。傍線部が本来割注であるべき箇所。

⑩同段「むくつけき事」の項

末尾に引用された歌「をのれのみ…」の詠者名「定家」が本書にはない。

⑪第九十七段「四十の賀」の項

「則業平歟云々」の箇所、本書には「別業歟と云云」とある。鉄心斎文庫本も片桐本に同じだが、本書の本文が正しい。

⑫第百段「忘草歌」の項

「是を本歌にて読。古今わするゝも…」とある部分、本書では、「是を本歌にて　続古今　わするゝも…」とある。鉄心斎文庫本も片桐本と同じだが、「わするゝも忍ぶも同じ…」の歌は、『続古今集』・巻十五・恋五・一三五三に載る従二位顕氏の歌なので、本書の形が正しい。

⑬第一〇五段「なめし」の項

「哀はきえばきえよなどいへるは」は、本書「命ハきえハきえよなといへるは」。鉄心斎文庫本も「哀は…」だが、むろん本書が正しい。

⑭第百七段「浅みこそ歌」の項

「源氏にも」は本書「源氏葵巻にも」、「あさみこそ袖はひつらめ」は本書「浅みにや人ハおりたつ」。『源氏物語』葵巻に載る光源氏の歌は「浅みにや人は下り立つわが方は身もそほつまで深きこひぢを」であるから、本書が正しい。

⑮同段「しとゞ」の項

「金葉連歌」の部分、本書は「業平連歌」とある。ここに引かれた「雨ふれば…」「かさ□□（ぎ）ならば…」の連歌は、『金葉集』（二度本）巻十・雑下・六六一によみ人しらずで載る。したがって、本書は誤り。

⑯第百八段「風ふけば歌」の項

「とこの時は」は、本書「とことはといふ詞の時ハ」。「とこの時は、は文字すむ也」では意味が通じないので、本書の本文がよい。

以上、覚書風に列挙してみたが、本書によって片桐本や鉄心斎文庫本の本文の不備を補ったり訂正したりできるところが少なくないことがわかるであろう。

おわりに

本稿では、基礎的な書誌的事項の検討にとどまって、兼如増注『伊勢物語紹巴抄』の注釈としての特色を考察するまでには至らなかった。紹巴の注に兼如が加筆した部分がどこなのかについての詳しい検討が必要であるし、同じ兼如増注本でも、本書は兼如の弟正益が所持していた本の写しであり、兼如の息兼与の所持本を写したものであることが奥書から知られる名古屋大学附属図書館蔵皇学館文庫本との間の相違はどの程度あるのか、そして、はじめに述べたように、そもそも同じ正益の奥書を持つ東山御文庫本との間にも異同がありそうなので、まずはその検討から始めなければならない。やるべき課題は多いが、すべて今後に期したい。

〔付記〕本稿は、国文学研究資料館の基幹研究「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉」による研究成果の一部であり、平成二十五年十二月二十五日に開催された第二回研究会において、「仙台伊達藩における王朝文学享受―猪苗代正益著『源氏栄鑑抄』を中心に―」の題で発表した内容の一部を取り込んでいる。

Isemonogatari-sho (*Johasho*) with an afterword by Inawashiro Shoeki

Yoshinobu SENO

This paper introduces an annotated book called *Isemonogatari-sho* (*Johasho*) with an afterword written by Inawashiro Shoeki. The focus in this study is on bibliographical items and the differences between this work and similar manuscripts that have been previously examined.